

【御船印を巡る旅】

(9) 日本旅客船協会船旅アンバサダー・小林希、熊本フェリー、技術力と夢詰まった船で旅を

「どこかへ旅をしたい」と思う時、私はよく地図を見る。自分がいる場所から遠い所や、行ったことのない地域など、地図を眺めているだけで旅情に駆られて、ワクワクしてくる。御船印にも、地図をメインにデザインしている船社がある。九州の有明海を東西の横軸に航路を持つ熊本フェリーで、熊本港と島原外港（長崎県）の間を運航している。

御船印は海の色である水色をベースに、九州全体の地図が載り、同社の航路が赤線で示されている。土地勘のない人でも、九州のどこに航路があるのか一目で位置が分かる。通常、ほとんどの地図に航路は載っていないので、有明海を渡って熊本―島原間を一気に移動できると知っている人は多くはないはずだ。

また、同社は「御船印めぐりプロジェクト」が始動した当初から参加している。デザインの意図を御船印担当者に聞くと、「スタイリッシュな船体のデザインに合わせた」と話す。さらに、御船印を購入すると、もう一枚スペシャルカードも付いてくる。同社の日本を代表する、国内唯一の高速カーフェリー「オーシャンアロー」に関する紹介が書かれたものだ。

1998年4月に就航したオーシャンアローは、“大海原を矢のように走る”という意味を込めて名付けられた。船体のデザインは、白を基調として、速さを表現したという青い線がシュッと矢のように描かれている。実際に、カーフェリーでありながら、21キロの航路を約30分（最大時速約55キロ）で進む「高速カーフェリー」なのだ。それまでの従来船は、2倍の1時間を要する。

新造船の設計をする際、高速性と経済性を両立させるべく計画が進められた。開発は、石川島播磨重工業（現ジャパンマリンユナイテッド）と東京大学船舶海洋工学科の宮田秀明教授との共同で進められ、日本で初めて超細長双胴船・スーパースレンダーツインハル（SSTH）が造られた。二つの超細い船が連結された構造で、全長72・09メートル、全幅は12・90メートル。燃費が良く、引き波を抑えるという要素も兼ね備えている。こうして、日本が独自に開発した世界最先端の高速カーフェリーが誕生した。

新造船「オーシャンアロー」が就航した年、有明海の短距離航路にもかかわらず速い船を走らせたことは、非常に話題となり、さまざまな「オーシャンアロー」効果を生み出した。熊本から雲仙（長崎県）への日帰りツアー、大型バスも9台搭載できるため、雲仙や阿蘇（熊本県）の温泉を巡るツアーなど、「オーシャンアロー」に乗船することを目的とした新たな旅行商品が次々に誕生し、多くの人たちが船旅の魅力を楽しめるようになった。

近年は、世界文化遺産に登録された南島原市（長崎県）の原城跡と天草市（熊本県）の崎津集落をレンタカーで巡る人も多く、両県をつなぐ九州横断クルーズとして重宝されている。観光における船の需要も、高速化とともに着実に伸びていったと言えるだろう。

今年1月、私も同船に乗った。雄大にそびえる雲仙を背後に、有明海にきらめく水面を滑るように走るオーシャンアローを美しく、心地良く感じた。そして、オープンカフェ風のカウンター、海の見える窓際の席、癒やりに満ちた雰囲気の船内売店で、御船印も購入した。

真夏の今は、ライチ風味のソーダにソフトクリームが載ったオーシャンブルーフロートなど夏メニューも売店で販売中だ。「オーシャンアロークルーズチケット」を買って、船内前方のスペシャルシートで、ドリンク付きのクルージング体験をするのもお勧めだ。

高速化を目指して生まれた、技術力と夢が詰まった船に乗って、忘れられない夏旅をしたい。

（日本旅客船協会船旅アンバサダー）

=本欄は月1回掲載します。

こばやし・のぞみ 05年サイバーエージェント入社。11年に退社し、世界放浪の旅へ。1年後に帰国し、作家に転身。15年に瀬戸内海の讃岐広島でゲストハウスを立ち上げ、以降離島コンテンツのアドバイザーとして活動。19年に日本旅客船協会の船旅アンバサダーに就任し、「御船印めぐりプロジェクト」を立案。これまで世界60カ国、日本の離島は100島以上を巡る。82（昭和57）年生まれ。



冬の島原の雲仙を背後に熊本へ進む、高速カーフェリー「オーシャンアロー」



小林 希氏